

第2号

～ サレジオ会宣教ニュース ～

2009年2月11日

会員の皆様、

私たちは、宣教の炎を再び生き生きと燃え立たせるために、どうしたら貢献できるでしょうか？特に、2009年9月に行われる第140回宣教者派遣のための総長の呼びかけに、惜しみなく応えることによって貢献できます。こんどの派遣は、私たちの会の150周年という背景のもとに行われます。2009年1月31日現在、確定している候補者はまだ23名です！

チャーベス神父は、宣教に派遣されることは、神のあがないの愛への応答である、と私たちに思い起こさせています。私たちを宣教へと、特に自分の国の外へと (ad extra)、人類の前線へと (ad gentes)、生涯をかけて出かけて行くよう (ad vitam) 駆り立てるのは、この愛です。

来る2月25日、サレジオ会の最初の殉教者、聖ルイジ・ヴェルシリアとカリスト・カラヴァリオの祝日は、missio ad extra, ad gentes e ad vitamに自分自身を捧げるようにとの呼びかけを思い起こす好機となるでしょう！

宣教顧問 ヴァツラフ・クレメント神父 SDB

第2号の内容

- ・ 宣教顧問より
- ・ 聖ルイジ・ヴェルシリア
- ・ サレジオ会の宣教の意向
2009年2月
- ・ イエス・キリストの下僕、使徒
- ・ 宣教師の手紙



1920年11月12日 韶州

神とのもとにとどまることのない宣教師は、その源流から断たれた水路のようなものだ。

- 多く祈る宣教師は、多くの実りを得る。
- 霊魂をたくさん愛しなさい。そうすれば、善を為すためのあらゆる秘策が授けられる。
- いつも、すべてをよりよく果たすことを目指しなさい。しかし、達成できたことで満足しなさい。
- キリスト者の助けマリアなしに、私たちサレジオ会員は無に等しい。

+L ヴェルシリア

2009年2月 サレジオ会の宣教の意向

《エリトリアのサレジオ会員のため。彼らが和解、正義、平和の効果的なしるし、勇気ある担い手になることができますように。》

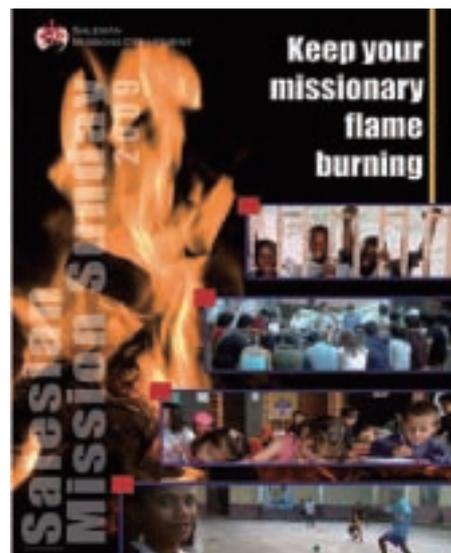
2008年11月、最後の外国籍サレジオ会員が国外追放された。現在、アスマラとデケムハレの二つの共同体に暮らすエリトリア人会員だけが、修練生、初期養成中の志願生と共に、国内にとどまっている。同国におけるドン・ボスコのカリスマの文化受容という大きな挑戦が投げかけられている。同国の若い会員たちは、私たち全サレジオ家族による強力な祈りの支えを必要としています。

教皇の一般・宣教の意向 : www.sdb.org 参照 本紙メール連絡先 : cagliero11@gmail.com

イエス・キリストの下僕、使徒

1. 人類は解放を求めています

この機会に、教皇の世界宣教の日メッセージを取り上げねばならないと感じています。なぜなら、そのメッセージは特に光を与えてくれるもので、多くのことを提起してくれるからです。『キリスト・イエスのしもべ、使徒』となるよう招かれているわたしたちにとって、何を置いても優先すべきことがらであることに変わりはありません。わたしが敬愛する前任者、教皇パウロ六世はすでに使徒的勧告『福音宣教』の中で、『教会はまさに福音をのべ伝えるために存在しています』（『福音宣教』14）と述べておられます。



2. 宣教は愛の行いです

ですから、キリストとその救いのメッセージを告げ知らせることは、あらゆる人にとってすぐにでも取り掛かなければならない務めなのです。パウロは『福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです』（一コリント9・16）といました。彼はダマスコへの途上で、あがないと宣教が神のみわざであり、神の愛であることを実感し、理解しました。キリストへの愛が彼をして、福音の伝達者、使徒、説教者、教師としてローマ帝国中の旅へと導きました。彼は自らのことを『福音の使者として鎖につながれています』（エフェソ6・20）と呼ぶほどでした。そして『すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです』（一コリント9・22）と彼にいわしめたのは、神の愛でした。聖パウロの生き方を見れば、宣教活動というものが、わたしたちに与えられた神の愛への一つの応答であることがよく分かります。神の愛はわたしたちをあがない、異邦人への宣教へと駆り立てるのです。その霊的なエネルギーこそが、個人や人種、民族の違いを超えて、すべての人が待ち望んでいる調和と正義、そして交わりをはぐくみます（回勅『神は愛』12参照）。ですから、人類の隅々にまで教会を導き、『第一の源泉』である『イエス・キリスト……の刺し貫かれた心から神の愛が流れ出る』（『神は愛』7）ところから飲むようにと福音宣教者を招いておられるのは愛である神なのです。この泉からのみ、配慮、優しさ、思いやり、受容、人の役に立つこと、人々の抱える問題に関心を寄せることを引き出すことができます。これらは他の諸徳と同様に、すべてを捨ててキリストの愛の香りを世界中に届けるため自らを完全に、また無条件にささげる福音の伝道者にとって、欠かせない美德です。

3. たえず福音化してください

世界中の多くの地域で、初期の福音化が必要かつ急務であり続けているにもかかわらず、現在、聖職者の不足と召命の欠如が、多くの教区と奉獻生活の会を悩ませています。ここであらためて確認すべきことは、困難が増す中であっても、すべての人々を福音化せよというキリストの命令が優先課題であることに変わりはないということです。どのような理由があっても、福音化を怠ったり、停滞させたりすることは許されません。なぜなら、『すべての人々に福音をのべ伝えることが教会の第一かつ本来の使命である』（教皇パウロ六世使徒的勧告『福音宣教』14）からです。

4. 「福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです」（一コリント9・16）

親愛なる兄弟姉妹の皆様、『沖に漕ぎ出しなさい（Duc in altum!）』。この世界という大海原に漕ぎ出し、キリストの招きに従い、その絶え間ない助けを信じて、恐れずにわたしたちの網を下ろしましょう。」

2008年9月28日、扶助者聖マリア大聖堂、第139回サレジオ宣教派遣式にて
パスクアール・チャーベス・ビラヌエバ神父
教皇メッセージを引用しての説教より（説教全文はwww.sdb.org参照）

宣教師の手紙

1930年2月13日、韶州

愛するお母さん、

[...] あと数日で、私たちの司教と勉強を終えた何人かの若い女の子たちとここを発ち、林州 Lin-Chow に戻ります。まる一週間の舟の旅です。航路は海賊でいっぱいですが、主が助けてくださると私たちは確信しています。そういったことすべてを前にして、私の心は穏やかで平安のうちにあります。私たちは何と神のみ手のうちにあると感じていることでしょうか！ [...] 勇気をもってください、お母さん、人生が苦難に満ちていることは、お母さんもご存じのとおりです。しかし、祈りと信頼のうちに、そしてイエスのみ心とキリスト者の助け聖マリアへの聖霊に照らされた信頼のうちに、多くの悲しみのただ中であっても私たちは平和を見いだすのです。何事も、お母さんを動揺させたり、こわがらせたりすることがありませんように。 [...]

[...] ここで、お母さんの祈りに自分をゆだねます。お母さんからの素敵な贈りものが届き、お母さんの優しい心を知っている私は頂いたものを大切に思っています。でも、お母さんが私に下さるいちばん美しい贈りものは、私のための祈り、私のためにたくさん祈ってくれることです。主の絶えざる助けだけが、司祭と宣教師たちの生活を支えるのです。祈ってください、私のためにたくさん祈ってください。私が自分の魂の救いと人びとの魂の救いのために全面的に献身する聖なる司祭になれるように。これまでお母さんがいつも、私が司祭になれるように祈ってくれたことを知っています。司祭になった今、私が聖なる司祭になれるよう、祈ってください。 [...]

変わらない愛情をこめて、あなたの息子、カリストより
（殉教の12日前に書かれた手紙より）